

# いっぽんこみちのすれちがい

9月7日、晴れ。

学校から帰って、いつもみたいにタコカフェのお  
てっだい。

でも、くる人たちがみんな、つかれた顔してるな。

ちよつと前まで、もつと楽しく笑ってたのに。お

姉ちゃんも、みんなみんな

「ひかる、はい。1番のテーブルね」

手の上に、おぼんが乗った。

それを見てぼくは、なんかへんだな、って思った  
んだ。

「ひかる？」

去年より、すこしちっちゃくなった うっくん、ぼ

くがおっきくなっただね。

「ひかる、どうかしたの？」

顔をあげたら、お姉ちゃんの顔があった。心配そ

うな顔。

だめだよ。こんな顔。

「だいじょぶだよ、ひかりお姉ちゃん。すぐ行くから」

ぼくのお姉ちゃんはひとりだけけど、タコカフェ  
の車の中では『ひかりお姉ちゃん』ってよんでる。も  
うひとり、お姉ちゃんって言わないと悲しい顔する  
ひとがいるんだもん。悲しい顔は、だめだよ

おぼんの上のものをこぼさないようにしながら、ぼ  
くはちよつとだけ早く歩いて1番のテーブルに行った。

おぼんをテーブルに乗せるのも、もう頭の上まで  
持ちあげなくていいや。ぼくが、おっきくなっただ、  
よ。ね。

おっきくなって、いろんなことができて、でも

「ぼく、どうすればいいんだろ？」

お客さんに食べ物わたして、タコカフェの車の方  
向いたら、いきなり声が聞こえた。

3 いっぼんこみちのすれちがい

ぼくの声だ、つてすぐにはわからなかった。

\*\*\*\*\*

新学期になつてもうじき一週間。あたしは、タコ  
カフェでジュース飲んでた。

「なぎさ？」

あたしは、か。ついさっきまで、あたしたちは、  
だつただけだ。

「な・ぎ・さー？」

まだ暑いし、外で座つてたくもないんだけど、お  
互い部活で忙しくて会えなかつたらなあ。

「なーぎさー？」

ああ、もう2日しかないよ。ひかりの

「なーぎさー♡」

つて、もおっ！

「ええいつ、ほのかっ！頭によじ登るなあっ！！」  
ぶるぶるっ、とほのかふるい落としたら、腰のあ

たりにしがみついて止まった。

まったく、もう！

高等部に入つて、最下級生になつてもモテモテだか  
ら、部の先輩からいろいろ言われてストレスたまつ  
てンのは知つてたんだよ。

だからあかね先輩に相談して、気が晴れるような  
ジュースまで作つてもらつただけだ。梅酒入りは  
逆効果だつたかなあ。

さて、と。今日タコカフェでほのかと会つての  
には、気晴らしだけじゃなくて、ちゃんと理由があ  
んだよね。

ひかりの誕生日、あさつてなんだもん。高等部に  
上がつて学校じゃ会えなくなつちやつたから、ここ  
は先輩として、なにかいいプレゼントでも

「なーぎさーちゃあ〜ん♡」

つて言い出したのはこいつなんだけど、これじゃ  
なあ。はあ。

「またため息い。もう、そんなにわたしじゃけんにするなら、藤村くんくつついちゃえばいいのにい」

むっ！

あたしにしがみついて、足をぶらぶらさせて、甘えたいほうだいくら許すけど、

「そ、そういうこと言つと、ほんとにくつついちゃうんだからねーだ！」

いくらほのかでも、ふれて欲しくないとこはあるんだよ！

って、あれ？ ほのかの目が大きくなった？

なんだかゆらゆらしてるし あ、ヤバっ！

「くつついちゃう？ なぎさ、くつついちゃうの？」

やーだあ〜っ！ い〜や〜だ〜あ〜っ！！

あ〜あ。ヘンなこと言つても忘れてあげな、ってあかね先輩は言つてたし、そんなくらの覚悟はできてたけどさあ　こんなのどーすりゃいいのよ、あたしはあっ！！

「せえ、のお　よいしょっ！！」

ばしゃっっ！！

へ？

一瞬、あたしはなにが起こつたのかわからなかった。いきなり目の前で、ほのかの頭がずぶ濡れになつてるんだから。

「え？ え？ ええええっっ！！」

「あの　よつてる人には、こうしろって　」

よくよく見たら、小さな男の子。ひかるが、バケツ持つて立つてる。

ぎゅっ、と手を握りしめて。固い表情であたしたちをまっすぐ見つめながら、大きく口あけて、思いつきり息すって

「お姉ちゃんに、かなしい顔、させないで！」

小さいけどすっごくよく通る声が、あたりに響いた。お姉ちゃんって、ひかり　？ あっ！

5 いっぱんこみちのすれちがい

本当だ。パンの前で、ひかりが心配そうな顔してこっち見てるよ。

まいったね、こりゃ完っ壁かべにあたしらが悪いわ。言い訳しようがないや。

「ほら、ほのか。起きなつて。『ごめんなさい』くらい、できるでしょ？」

あー、いや。どっちかって言つと、ひかるに『ありがとう』かな

まだ頭がくるくるしてるけど、とりあえずあたしはそれだけ答えた。助かったのは間違いないし。あとのフォローは、あたしの役目だよな。

「ありがとう、つて、いいね」  
え？

ひかるにいきなり言われて、あたしはちょっとほかんとしちやっただよ。

「ひかる」  
「？」  
にっこり笑つて、うなずいて　パンに戻つてくひかるを見ながら、まだあたしがほかんとしてると

「いいわね、ひかるくん。ひかりさんが羨ましいわ」  
手で顔の水を払いながら、ほのかが言った。さっきまでとちがつて、しゃんとした声で。

うらやましい、か。そうだね。

「あーあ。自分がどんなに恵まれてるかなんて、わかつてないんだろうなア、ひかりつてばさ」

\*\*\*\*\*

「あの　大丈夫、ですか？」

ひかるが戻つていったパンから、今度はひかりがタオル持つて走つてきた。

「ああ、へーきへーき。正気になってくれて助かつたくらいだよ」

ほん、つて隣のほのかの肩たたきながらあたしが言つたら、

「正気つて　まあ、そうね。心配かけちゃつてごめんなさい、ひかりさん。」

そういえば、ふたりのお誕生日って、あさってよ  
ね？」

ああ、まだちょっと正気じゃないか。誕生日プレ  
ゼントの相談してんのに、本人に誕生日確認するっ  
てさあ。

「あ、はい」  
あれ？ なんだろ、ひかりのこの反応。いや、ちよ  
つと待てよ

「ふたり？ そういえば、ひかるの誕生日って」  
「ひかりさんと同じ、でしょ？」

ほのかの言葉に、あたしはちよつと考えた。  
いいや、今までそんな話いちども出なかつたはず  
だけど

「ひかるの誕生日、ですか。その　　ない、ですね」  
「ない!?!」  
思わずふたりで顔見合わせてハモっちゃった。な  
によ、ない、って？

「ええ。わたしたち、もともと誕生日ってないです

し　わたしの誕生日だって、ほのかさんたちから  
頂いたものじゃないですか」

ああ、そつか。思い出した　　でも！  
「でも、ひかるも学校行ってんでしょ？ 誕生日な  
かつたら　　」

「そこは、大丈夫みたいです。なぜか、だれも気がつ  
かないんですよ。わたしのときも、そうでしたから」  
あー　　うん。

ちよつと痛くなつて、手で頭おさえちゃった。そう  
だ、そうだったよ。このふたり、居るだけでまわり  
にみよーな影響だしてンだった。

「　　ちよつと、ひかるくんに訊いてみた方がよさ  
そうね」

あたしにだけ聞こえるように、こつそりほのかか  
言つた。うん。ちよつと締め上げ　　じゃなくて、話  
きこうか。

「あの、なぎささん？」  
目の前で首か上げてるひかりに、あたしは顔上げ

て言ったんだ。

「バケツの水で薄まっちゃったし、ジュースもうふたつ追加ね。氷いっぱい。お願いっ！」

でっきるだけ笑顔作ったはずなのに、気味悪そうに歩いてくひかりの姿が、ちよっとカンにさわるなま、いいけど。

\*\*\*\*\*

「おまたせしましたー」

しばらくほのかと話して、だいたいまとまったところで、ひかるがジュース持ってやってきた。

テーブルの上にひとつつつ、あたしのと、ほのかのと あれ？なんか今までと違う？

「ひかるくん、テーブルの奥まで手が届くようになっただのね」

あ、そっか。なんか違うなー、って思ったんだけど、背が伸びたんだ。ちゃんと成長してるんだよねえ

んじゃ、いきますか。

「ひかる。ひかりの誕生日があさってにあるけど、ひかるの誕生日っていつ？」

「たんじょうび？」

「そう。あんたが生まれた日」

「 ないよ」

きよとん、って目が、あたしたちの間を行ったり来たりした。

さつき、ひかりに言われはしたけど

「ない、か」

本人から直接聞くと、やっぱりショックだなあ。

「たんじょう日、べつにいらぬい。お姉ちゃんがいればいい」

あゝ、もう！

言ってることはカワイイんだけど、意味が重過ぎるっつーのっつ！！

「たんじょう日って、だいじなの？」

って、思わずテーブル叩いちゃう寸前で、言葉が

響いた。ひかる？

「だいじよ。この世界にやってきた日だもの。その日がなかつたら、その人には会えないんだもの。とっても、だいじよ」

ほのかの言葉が、ふわっと広がった。

「そっか。だから、おねえちゃん誕生日はお祝いするんだね」

ほのかはあたしの向かい側の席に移って、余ってる椅子にひかるを座らせてる。ほのかに任せて正解だったね。あたしじゃこうはできないから。

「ひかるくんは、ひかりさんの誕生日、お祝いしないの？」

「お祝いしたい。けど おねえちゃんは、なにもいらないから、そんなむりしないでって」

むり 無理、ねえ。

あたしがちらっとテーブルの反対側を見たら、目を合わせたほのかが頷いた。悪いクセがでたかな、こりゃ。

「道は一本だつてのに、なんでわざわざすれ違つかねえ」

ほのかに最後まで任せるつもりだったけど、少し考えちゃってる顔のひかる見てたら、思わず言っちゃったよ。

あとで、ひかりをとっちめ 話した方がいいかなあ？

「ねえ、なぎさ」

「ん？」

どうやってとっちめ とか考えてたから、ちょっと生返事になっちゃったけど、

「いっぼん道の相手をまっすぐ見てなくても、道の脇ならよく見えるわよね？」

ん？ん？ わかんない。どーいう意味？

「だからね、なにもいらないなら、なにもあげなければいいのよ。直接本人には、ね♡

ねえ、ひかるくん。あかねさん呼んできて欲しいんだけど、いい？」

「あかねお姉ちゃん？ いいけど」

不思議そうな顔でパンに歩いてくひかるを見ながら、あたしはヘンだなあと思ってた。

まあ『あかねお姉ちゃん』もヘンなんだけど、それ以上に、

「あかね先輩呼んでなにしようっての、ほのか??」

\*\*\*\*\*

「なるほどあ。喜んで欲しい弟に、負担になりたくない姉、ね」

腕組みして立つてるあかね先輩を、あたしたちはじつと見つめてたんだ。

ひかるが呼んだらすぐに来てくれたんで、ひかるの言葉をまとめてちよこつと言っただけなのに、あかね先輩はすぐわかってくれた。苦笑いつきで。

そりゃそっか。あたしらよりずーっと一緒に見て

るんだもんね。で、問題はどっ思ってるか、なんだけど

「誕生日だから、タコカフェ休みにして、パーティーでも開こうか、ってあたしも言っただけどねえ」

「止められたんですね?」

ほのかが言ったら、こくと頷いて、

「普通にお店やんなくちゃダメだ、って怒られちゃったよ。あんまり景気よくないからねえ、ははは」

「ひかるくんにも、なにもいらない、無理しなくていい、ですからね」

はあ、ってため息が、周り中から聞こえてきた気がするよ。

「言い出したらガンコだからなア まったく」

やっぱ、あかね先輩もあたしたちと同じかあ。なにに知ってるかなあ、ってちよこつと期待したんだけど

「ところで、あかねさん。ひかるくんが笑うときって、どんなときですか?」

ん? ほのか?



「ああ、そりゃ簡単だよ。ひかりがほめられたときさ。自分がどんなにほめられても笑わないのに、ひかりがほめられるとすっごく喜ぶんだよね」  
 ほん  
 と、お姉ちゃんっ子だわ

「ですよ、ね」

え？なんでそんな？

「ほのか、一体なにを」

ってあたしが言おうとしたとたん、口の前に手が出てきて、それ以上言えなくなっちゃった。

「だから、こんなのはどうですか？」

ほのかが話すのを、あたしとあかね先輩の二人でしばらく聞いて、たん、だ、けど えええっつ!!?

「へへえ。ほのかちゃんも、ずいぶんなぎさに毒されたもんだネえ」

「ちっがうう！ほのかの意地の悪さは会ったときからだよっ!!」

いや、確かにうまく行きそうだけど。でも「ふふふ。意地が悪くて結構ですよーだ。それじゃ、あかねさん。ひかるくんの許可、おねがいますね♡」

あかね先輩が、任せなさいって笑って言って車に戻ってくるのを、あたしはじつと見送った。

いいのかなあって思ったけど あかね先輩 保護者がいいって言うんだもんね。うん。

「よおっし、そんじゃいつちよ、やりますかっつ!!」

\*\*\*\*\*

今日は、9月の9日。日曜日で、わたしの誕生日。学校の友達は、お祝いしてくれる、って言うてくれたのだけど、わたしは全部断った。

だって、タコカフェのお仕事があるんだもの。

特に昨日のタコカフェは午前中だけ営業で、午後はお休みだもの。今日はちゃんとやらなくちゃ。

昨日のあかねさん、お出かけだから休んで言っ  
てたけど やっぱり、プレゼント買いに行ったの  
かな？ うれしいけど でも、大事なのはお店を  
続けることだもの、わたしはその次、次の次、ね。

\*\*\*\*\*

ようやく涼しくなってきた朝の間に机と椅子を並  
べて、ひと息つけたわ。

じゃあ、もうすぐお客さんが来そうだから、コッ  
プとお盆用意して

「ああ、ちょっと待った。ひかり」

そう思って、休んでいた車のシートから立ち上が  
ろうとしたわたしに、あかねさんの声がかかったの。

「はい？」

「今日は一日、ひかりはバンの中ね。運ぶのはひか  
るオンリー。いい？」

「え？でも」

うん、っておもいつきり頷いてるひかるを横目に、  
わたしは言ったのだけど、

「い〜い？」

「あ はい」

顔を思いっきり近づけて笑顔で言われちゃったら、  
しかたないわ。

誕生日だから、仕事少なめってことかな？

そんな風に考えてたから、見逃したの。

よくよく思い返せば、このときのあかねさん、ちょっ  
といつもと違う笑い方してた。

わたしより小さい子、いたずらっ子の笑い方

\*\*\*\*\*

はじめは、声だけだったの。

「おめでとう！」

「ありがとう」

お昼ごろになって、お客さんが増えてきたころに

聞こえてきた、お客さんとひかるの声。ずいぶん喜んでる声ね、って、そう思っていたんだけど。

「おめでとー！」

「ありがとー」

また別の方から、別のお客さんとひかるの声。それも、まったく同じやりとり　??

「どうかしたのかしら、ひかる」

わたしが車の横の小さな窓から覗こうとしたら、

「　　そうだね、そろそろかな。」

ひかり、「ここはいいから、ちょっと外出てきな。ただし、お客さんのところ行っちゃダメだからね」

え　　？

あかねさんの顔を見上げたら、にっこりの笑顔があった。

「いいから、いいから。さあ、行つといで♡」

なん、なのかしら？でも、そう言われちゃったら、

行くしかないし

なんて考えながら車の外に出た瞬間、考えてたことが吹っ飛んじやったわ。

「ひかるくんっ」

だって、席からあふれるくらい女の子がいるし、

「ひかるくん、こつちもーっ」

それに　　なんなのこの『ひかるコール』!?

「はぁーいー！」

ひかるはコールに答えて走って行って　　ああ、なんであかねさん、お客さんのところ行っちゃダメなんて言つたのかしら。これじゃあ、ひかるが壊れちゃ

「せえ、の　　おめでとあーっ♡」

「ありがとー」

え？　　な、なに!?

お客さんのところに行つて、挨拶してる、だけ??

「ひかるくんっ」

ああ、また呼ばれてるわ。わたしの正面にある席のお客さんのところに行つて

「お誕生日、おめでとあーっっ！」

「ありがとーっ」

うわぁ

わたしは一瞬、まばたきできなくなった。

なんて、なんてきれいな笑顔！ ひかるって、こんなに笑えるんだっただかしら？

ああ、また別のお客さんのところ行くみたいだわ。

「お姉さんのお誕生日、おめでとっ！」

「あ、ありがとあー♡」

また、見れた。不思議、だけど、とつてもきれいな笑顔だわ。『花が咲いたみたい』って言い方を讀んだことがあるけど、本当にまわりが花でつつまれたみたい

「きて、よかつたね」

「うん♡ 雪城さんの言ってた通りだわ」

いま挨拶してたお客さんが、ひかるの後ろ姿を追

いながら話してる。雪城さん ほのかさん!?

「おっ、いっぱい来てるねえ」

「ほんと、頑張った甲斐があったわ」

あっと思っつて横を見たら、なぎささんにはのかさん。すぐ隣まで来ていたのに、全然気が付かなかった。あら？ いま、なんて？

「頑張った っつて？」

「まあいいからさ、よく聞いておきなよ」

「そうそう。みんな、あなたをお祝いしてるんだも

の♡」

わたしを？

「そう。みんなひかるくんにおめでとっつって言うてくれるの。ひかりさんの誕生日を、ね」

言われて、わたしはお客さんの方を見た。

ひかるがあつちこつちに駆けまわりながら、お客さんの『おめでとっつ』を聞いて、あの笑顔で応えて

「部の先輩がたや、クラスの子たちに言ったのよ。

『今日、タコカフェの男の子におめでとっつ、って言っ

たら、とつても喜んでくれますよ』って」

「あたしもラクロス部と あと、ちよつと弟使つて初等部にもうわざ流したんだ。なんでか中等部にも伝わったみたいだけどね」

なぎささんたちの声が、ちよつと遠くに聞こえる。

そんなに多くの人たちが、ひかるのために集まっていたんだわ

「さあ、それじゃわたしたちも行きますよ、なぎさ」

「よおし。よく見てなよ、ひかり」

つて、なんで？

「えええつっ!?! だって、わたし目の前にいるんですよ？ まっすぐお祝いしてくれば あ痛っ！」

「コツンっていうげんこつが、軽くわたしの頭にあたった。」

「それが言えるんだつたら、弟に遠慮なんかすんじやない、つてのよ。んじや、そこでしつかり反省しなね」  
くるつと振り向いて、歩いていこうとするなぎささんの背中に、ひかるの顔が浮かんでくるみたいに

感じるわ。

そつか ひかる、わたしをお祝いたかつたんだ。あんな笑顔になるくらい、本当に、心から

なんだか、ちよつと顔が熱くなつてきて、わたしは下を向いてただけど、

「ああ、またお客さん来たよ。初等部に中等部に高等部に ありや、OLさんも!?!」

いやあ、あかね先輩の友達にも、ひかるファンっているんだなあ」

「急ぎましょ。さあ、なんて言ったら喜んでくれるかしら♡」

「一番喜ばせてくれた子には、ありがとっのキス、だつたっけ？」

え？ いま、なんて!?!

「そう！ あかねさんが、ひかるくんのおKもらつたのよね。本人は、あまりよくわかつてなかつたみ

ただけど  
「

ち、ちよ

「狙ってる子、結構多いみたいだよねえ」

ちよ、ちよっと

「そうね。あっちの初等部の子たちなんか、ちよっぴり殺気を感じるもの。ふふふ、もてもてね」

ちよっと、ちよっと！ちよっとおっっ!!

ひかるの方に駆け出していくなぎささんたちの背中に、わたしは思わず走り出した。

「だめーっ!! お、お姉ちゃんは許しませんっっ!!!」

—おしまい—